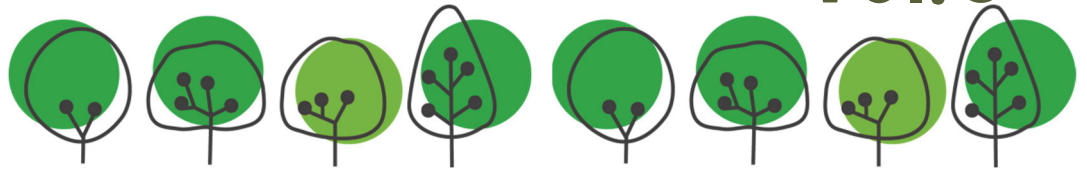




# 木地師のふるさと

vol.6



R2. 6発行

## 『うるし<sup>うるし</sup>は生き物』<sup>ぬし</sup>木地を彩る塗師の思い

～ Suzanne Ross さんインタビュー ～

令和2年7月に予定していました「木地師文化フォーラム」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため開催を中止することになりました。楽しみにしてくださった皆様には、たいへん残念なお知らせとなりましたが、今は一刻も早い事態の収束を願い、来年度には、皆様とお出あいできることを楽しみにしています。

同フォーラムでは、輪島塗作家としてご活躍の Suzanne Ross (スザン・ロス) さんをお招きして、「伝統工芸である輪島塗をはじめとする漆器文化、日本文化の魅力を後世に継承していくことの意味」をお話しいただく予定でした。来年度のフォーラムには、ぜひお越しいただけるようお願いをしています。

令和2年度「木地師文化フォーラム」は中止します。

今回は、スザン・ロスさんにインタビューをしてきましたので中面で紹介します。

### Suzanne Ross (スザン・ロス) さん プロフィール

現在、公益社団法人 AC ジャパンの「認め合うことが、チカラになる。」に出演などでご活躍！

1962年イギリス、ロンドン生まれ。美術とデザインを学んだ後、来日。1990年から輪島に居を構え、石川県立輪島漆芸技術研修所で人間国宝の先生方から教えを受け、個展や伝統工芸展などで作品を発表している。

第16回金沢城兼六園大茶会展で石川県知事賞受賞をはじめ、石川県伝統工芸展入選ほか、受賞多数。2004年にはハワイやニューヨークで、日本の漆を紹介する講演会やワークショップを行い、漆の魅力を国内外に発信し続けている。

漆塗りを通じて若者に日本文化や日本人の持つアイデンティティを伝え継承する活動も精力的に行っている。



# スザーン・ロスさんインタビュー

今年3月に輪島市の「Ross Studios Gallery」を訪ね、スザーン・ロスさんにインタビューしました。日本文化に対する熱い思いを伺うとともに、今後の東近江市の取組へのご協力を約束していただきました。その一部をご紹介します。

「漆は生き物」2度と同じものができない、そこが面白い

ロスさんは、ロンドンで美術とデザインを学んだ後、来日されました。来日のきっかけは、大学在学中に展示会で見た尾形光琳の作品との出会いだっつとロスさんは言います。

「当時、私はガウディやスペイン、パリなどアールヌーヴォーに関心があり、日本文化に興味はなかったのですが、美術やデザインを学ぶ学生でしたので、江戸時代をテーマとした展示会に足を運びました。そこで、尾形光琳の作品に魅了されたのです。作品名は忘れましたが、日本の高い美意識は黒と白のバランスから生まれる“余白”にあると強く感じる作品でした。それをきっかけに日本文化に触れ、漆塗りの技術を学ぼうと日本への留学を決めました。」

1990年から輪島で暮らすロスさん。留学時の想像とは違つたと話されます。

「漆塗りはペンキみたいなもので、3箇月程の留学でマスターできると思っていました。

“本物”を伝えていくことが重要



漆に対する思いを語るロスさん

お客さんとのやりとりの中で重視していることは

「最近、作品の値段を安くしたり、説明が簡単になってきていますが、そうすると他との違いがなくなってしまう。私は多くの時間をかけて、全ての工程を説明しています。“本物”とはこういうものだ」と知ってもら



ロスさんのギャラリー「Ross Studio Gallery」

しかし実際に触れてみると、技術を身につけるには本当に長い時間が必要で、今を迎えています（笑）。ようやく、ロクロを回す以外の工程は一人でできるようになりましたが、そのために研修所を4回も卒業しました。」

ロスさんを惹きつける漆の魅力とは

「漆は生き物です。天気によつても出来が異なり、同じものが2度とできないところが面白いと感じます。人、樹、環境という3つの生き物がコラボレーションしてできあがる。奥が深く飽きることはありません。」

うことが重要だと考えているからです。そうすることで、最初は高いと感じたお客さんも、最後には本物の価値をわかってもらえます。」

漆や日本文化に対する価値観や製作への熱い思い

「以前は、器を1年待つのは当たり前でした。製作にはそれくらいの時間が必要です。時間を短縮すると、どこかの工程を抜くことになります。良いものを届けるためには、お客さんにそういった工程も知ってもらうことが必要です。私は、工程のプロセスを写真で送ったりしながら、今どういう作業を行っているかを伝え、完成を楽しみにしてもらっています。」



# 岩手県二戸市浄法寺町への調査

令和元年9月に岩手県二戸市浄法寺町の「浄法寺漆」と「浄法寺塗」について、調査を行いました。浄法寺歴史民俗資料館では、昭和62年に漆に関連する資料、木地製品や道具類、生活用品など3,832点が国の重要文化財として指定されています。

## 浄法寺の漆と漆器の歴史

浄法寺町は、古くから漆とともにあった地域で、その起源は、平安時代に遡ります。

地元の人が「御山」と呼ぶ古刹「天台寺」の僧侶たちが、日常に使う器がその由来と言われており、その飯椀・汁椀・皿の三ツ椀に「御山御器」の名前が残り、天台寺との深い関わりを伝えています。

もともと豊富な漆の木があったことを背景に浄法寺塗がこの地で発展し、漆は当時の盛岡藩の貴重な産物になりました。明治時代に入ると、漆生産量の増加に伴いその販路は海外にまで広がり、戦後間もない頃には、国産漆は高値で売買され浄法寺漆は盛況を迎えます。しかし、その後時代や生活様式の変化、

価格の安い輸入漆に押され、浄法寺塗は途絶えてしまいました。

そんな地域の資源と技の復活を目指し、拠点として、平成7年に二戸市浄法寺漆芸の殿堂「滴生舎<sup>てきせいしゃ</sup>」がオープン。地域ぐるみで「浄法寺漆の世界」を伝える活動が続いています。



浄法寺歴史民俗資料館

## 浄法寺の木地師

この地域の木地師は、安比川の流域を移動していたと伝えられており、旧浄法寺町と旧安代町の一帯や、「御器畑<sup>ごきばた</sup>」と呼ばれる地域、その他「畑」の付く地名には、かつて木地師が暮らしていたと言われていました。

江戸時代に書かれた盛岡藩家老の日記「盛岡藩家老席日記雑書」に、漆生産や木地師について詳細に記されています。



漆掻きの様子



漆の樽



漆の木々

浄法寺の木地師の記述は、「浄法寺町史」のほか、八幡平市赤坂田の関家に伝わる「木地師元祖略御縁起（親王縁起）」（君ヶ畑の高松御所が発行）にもあります。

他に天台寺の僧坊でも漆器は作られていたようですが、その詳細は不明です。明治時代に廃業届が出されているので、作られていたことは間違いないと考えられています。

※次号で続編として、滴生舎や漆、近江商人との関わりに関して報告する予定です。

# 今年度も東近江市では木地師に関する取組を進めます

今年度も東近江市では木地師のふるさと発信事業を着実に進めていきたいと思えます。取組の様子は本ニュースレターや東近江市ホームページ、Facebook でお知らせします。木地師に関する情報やお気づきの点がありましたら、ぜひお知らせください。

## 【今年度の主な取組】

- 学識経験者による木地師の歴史・文化に係る調査研究
- 木地師のふるさとアーカイブ・プロジェクト（木地師資料の分類・整理）
- 木地師文化の普及・啓発（市内公共施設等での展示など）

アーカイブ・プロジェクトの活動：ボランティアスタッフ(10名程)の協力により行っています。



製図作業



台帳作成作業



フォーラム会場での企画展示



フォーラムでの事例発表

## 木地師のふるさと 東近江市

発行：東近江市企画部企画課

〒527-8527 滋賀県東近江市八日市緑町 10 番 5 号

TEL (代表) 0748-24-1234 (直通) 0748-24-5610

FAX 0748-24-1457

Email [kikaku@city.higashiomi.lg.jp](mailto:kikaku@city.higashiomi.lg.jp)

Facebook <https://www.facebook.com/higashioumi.kijishi>

(Facebook では随時、お知らせ等を行っています!!)

